

レオンは喉の奥で息を詰めた。

びくびくと震えてしまう自分の体を、どうにか抑え込もうとする。だが、意識すればするほど、触れられている場所ばかりが鮮明になっていく。

ノアは作業台の前にしゃがみ込むようにして、台の上に乗せられたレオンの股間をまじまじと観察していた。無意識なのか、あるいは必要があってしているのか、その指先は先ほどから太腿の内側を押さえている。

ちょうど、最初に見つけた淫紋のあたりだ。

指先が紋の縁を確かめるように、すり、と何度も撫でられる。

——ゾクゾクツ……。

背筋を這い上がるような感覚に、レオンは肘をついたまま肩を震わせた。

内腿から腹の奥へ、熱が糸を引くように伝わっていく。口の中に残る疼きと、股間を覗き

込まれている羞恥が混ざり合って、体のどこに力を入れればいいのかわからなくなる。

逃げたい。

だが、逃げられない。

逃げられないことが、さらに体をおかしくする。

「もしかしたら、潜伏紋かもしれないな」

「せんぷく……？」

「普段は表面に出ず、一定以上の身体的興奮や魔力反応が起きた時だけ浮かび上がる補助紋だ。隠し紋様、と言ったほうがわかりやすいか。核を隠すにはよくある手だよ」

「それって……」

レオンが言いかけた、その瞬間だった。

——ちゅう。

濡れた音とともに、ノアの唇が睪丸に触れた。

「っ——!？」

体がびくりと跳ね、吊られた太腿が固定具の中で揺れる。作業台に肘をついたまま、レオンは声にならない息を吐いた。

柔らかい。

熱い。

さつきまで淡々と観察していたはずのノアの唇が、肌の薄いそこへ吸いついている。

そのあまりに直接的な感触に、頭の中が一瞬真っ白になった。

——チュ、ジュルツ。

「あっ……んっ……」

ノアは躊躇いなくレオンの睪丸を口に含み、舌の上でゆっくりと転がしてくる。薄い皮膚

の表面を舌先でこねるように撫で、唾液を絡ませては一度解放し、また思い出したようにじゅるりと吸い込む。

観察の延長だとしても言うのか。

それとも、これも解除に必要な手順なのか。

そんなことを考えようとしても、まともに思考が続かなかった。

腰がびくびくと跳ねる。固定具に吊られた太腿が震え、作業台がわずかに軋んだ。やめろ、と言わなければならない。そう思うのに、その言葉がうまく喉を通らない。

レオンは股のあいだにあるノアの頭へ手を伸ばした。

だが、押し退けるはずだった指は、灰色の髪に絡まっただけだ。力が入らない。まるで体が勝手に、与えられる感覚を受け入れ、もっと欲しがっているようだった。

「ノア……んっ♡ そんな、とこっ……あっ！」

——ツーツ。

ノアの舌が、睪丸の隙間をなぞった。

濡れた舌先はそのまま上へ這い、竿の裏筋をゆっくりとたどっていく。根元から先端へ。逃げ場のないほど丁寧に、熱を拾い上げるように舐められて、レオンの背中が反った。

先端にたどり着いた瞬間、ノアの唇がためらいなく性器を咥え込む。

——ジュルツ。ヂュププ。

そのまま唾液に濡れた熱い感触を絡めるように、根元近くまで咥え込まれる。ぬるりとした口内に包まれた瞬間、ぞくぞくと背筋が震えた。

だめだ。

このままでは、すぐに達してしまう。

淫紋を刻まれたうえに、学友相手にこうもあっけなく果ててしまうなど、屈辱的にもほど

がある。そう思うのに、ノアの口内で扱かれるたび、じくじくと欲が積み上がっていく。

堪えきれない蜜が先端から滲む感覚を、レオン自身もはつきりと覚えてしまった。

——チュクツ。

「うんっ……♡」

不意に先端を吸い上げられ、危うく喉の奥から声が漏れそうになる。

レオンは肘で作業台を押さえつけるようにして、ぎりぎりのところで堪えた。

そんなレオンの事情に気づいているのかいないのか、ノアがふいに唇を離し、顔を上げる。

「すごいな」

「な、何が……」

上ずった声で尋ね返すと、股間越しに目が合った。

気まずいのは、どうやら自分だけらしい。ノアは何かの発見をした時のように、灰色の目をきらきらと輝かせている。

「甘いんだよ。君の精液が」

あまりにも予想していなかった発言に、レオンは言葉を失った。

そのあいだにも、ノアは自分の言葉を確認するように、レオンの性器の先端へちゅるりと吸いつく。さらに、滲んだものを舐め尽くすように、舌尖で擦った。

——ちゅる、ちゅ、ちゅ。

「あうっ……くっ……」

じわりと、また先端から蜜が滲む。

その味の甘さがよほど気に入ったのか、ノアはしつこく舐めてくる。先端を舌尖で撫で、吸い上げ、また舐める。観察のためと言い張るには、あまりにも執拗だった。

「これも淫紋の効果だな。予想よりかなり高度な術式だ」

「わ、わかったから……そんなに、ぺろぺろ、ちゅるちゅる舐めないでくれ……」

「それは無理だ」

レオンを咥えたまま、ノアはきつぱりと言い切った。

「無理って、おま……あつ、んっ♡」

——デュプププ。

抗議の言葉を遮るように、ノアがまた深く咥え込んでくる。

まるで離したくないとでもいうように、根本を手でにぎりながら、熱い口内へレオンの性を沈めていった。唾液をたっぷり絡ませ、じゅぶじゅぶと音を立てながら、頭を上下に動かす。

口内の熱。舌の動き。根元を締めつける指の圧。

そのすべてが重なった瞬間、堪えようのない昂ぶりが一気に吸い上げられていくようだった。

「美味すぎる。もっと出してくれ、レオン」

「はっ、や、やめっ……んんっ♡」

——ジュルツ、ジュブジュブ。

ノアの喉が、さらに深くレオンを受け入れる。
だめだ。

もう、無理！

「ああ、待て、吸うなっ、あっ、ああ——！」

——ビュクンツ！

背筋が大きく震えた。

レオンの意思などまるで関係なく、昂ぶりが限界を越える。作業台に肘をついたまま、腰が跳ね、固定具に吊られた太腿がびくびくと震えた。

性器の奥から熱がせり上がり、そのままノアの口内へ吐き出される。

喉の奥から、情けない声が漏れた。

ようやくレオンの性器から顔を離したノアは、まるで味の余韻を確かめるかのように、ゆっくりと口元を手の甲で拭う。

「たまらないな……淫紋の効果だとわかっていても、歯止めが利かなくなる」

「す、吸うなって……言っただろ……」

羞恥のせいで声が震えた。

だが、それ以上におかしいのは、体の熱と昂ぶりが少しも治まらないことだった。射精したばかりだというのに、中心はすでに膨らみを取り戻しはじめている。